房総の山のフィールド・ミュージアム　ニュースレター

しいむじな

発　行
千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

発　行
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/

2017(平成29)年6月発行

2017・夏
57

ふきのとう

この写真は二月末のある日、君津市立三島小学校の教室博物館にTさんが持ってこられたふきのとうです。Tさんは三島小の近くにお住まいの山菜採りが好きなご婦人です。そのTさんにこんな質問をしてみました。

「ところでTさん、ふきのとうに雄と雌があるって知ってました?」

「そうなの?　知らなかった」

「この星型の小さな花が見えているのが雄です」

「へえ、じゃあ雌は?」

「雌の花はこっち。白くて細い歯ブラシの毛みたいでしょう?」

「ほんとだ、今まで気にしたことなかったなぁ」

同じく三島小の近くにお住まいのKさん(女性)にも尋ねてみました。

「知ってる、近所のおばあちゃんに教わったよ。ふきのとうは雌がおいしくて、雄はまずいんだって」

(特集で詳しく紹介します。)

(尾崎　煙雄)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

特集

ふきのとうの雌と雄

ふきのとうはフキという植物の花です。もう少し正確にいうと、フキの「伸び始めの花茎とそれを包む苞葉」です。花茎とは花をつけた茎のことで、苞葉とは花を保護する役割の葉です。ふきのとうの場合、二〇枚くらいの苞葉が花の集まりを包んでいます。なお、ここでは植物の種名としての「フキ」はカタカナで、山菜としての「ふきのとう」はひらがなで書くことにします。

フキには雄株と雌株があって、花を見れば区別できます。まず、フキの花の作りから説明しましょう。ふきのとうの苞葉の中には「丸い塊が数十個あります（**写真❶**）。この一つ一つの塊が「花の集まり」です。一つの塊の中に小さな花がたくさん入っていて、その形が雌雄で異なります。雄株には五枚の花びらが星型に開いた小さな花がたくさん集まって咲きます（**写真❶**）。一方、雌株の花には雄の花のような花びらはなく、白い毛のようなものが束になっていて歯ブラシを連想させます（**写真❷**）。

山菜としてのふきのとうの旬は房総では二月から三月頃ですが、やがてふきのとうは花茎を伸ばし見た目にも花らしくなります。雄株は高さ二〇センチ程になります（**写真❸**）が、花が終わるとじきに枯れてしまいます。雌株の方は雄株の倍以上の高さに伸び（**写真❹**）、四月後半には結実します（**写真❺**）。フキの果実にはタンポポと似た綿毛があって、これを見ればフキがタンポポと同じキク科の仲間であることが納得できます。フキが結実する頃には丸いフキの葉がすっかり開いています（**写真❺**）。「きゃらぶき」などにして食べるのはこの葉の茎（正確には葉柄）です。

Kさんのお話でふきのとうの雌雄で味が違うというのは初耳で、そして「雌だと教わった」といってKさんが指さしたのは雄株の方でした。「雌の方は花びらがあってかわいいが、雄の花はかわいくない」のだそうです。このお話が印象深かったので、後日、長野県北部の山村を訪ねた折に山菜採り名人のご婦人に同じ質問をしてみました。その答えはKさんとまったく同じものでした。つまり「ふきのとうの雌雄は区別しており、生物学的な意味での雄株の方を「雌」と呼び、食べるには「雌」の方がよい」のだそうです。やはりふきのとうは雌雄で味や食感に違いがあるのかもしれません。そしてその知恵が、雌雄を生物学的な性別とは逆に認識している点まで、遠い長野県と共通していることに驚きました。

また別の機会に、館山市在住のFさん（男性）に同じ質問をしたところ、これまた面白いお話を聞かせてもらいました。Fさんのお話を要約すると「ふきのとうに雌雄があることは知っているが、そもそも房州（館山市を含む房総半島南部の旧安房国を指す）の人は昔からあまりふきのとうを食べない。なぜなら房州は温暖なので冬でも畑になにかしらの作物があるから、ふきのとうみたいな土手の草など食べる必要がない。上総（君津市を含む房総半島中部の旧上総国）の人が房州にふきのとうを採りに来ることがあるが、房州の人は『どうぞ、好きなだけ採っていっておくれ』と言う」のだそうです。上総と長野県の食文化に共通点があったのに、お隣の房州ではこんなに違うというのも驚きでした。ふきのとうにまつわる文化について、今後も探求したいと思っています。

写真❶　雄の花

写真❷　雌の花

写真❸　雄株

写真❹　雌株

写真❺　綿毛を持つ果実をつけたフキの雌株。丸い緑のフキの葉は花茎とは離れて生えてくるが、地下茎でつながっている。

コラム

房総丘陵の動植物（5）

地衣類

房総丘陵の開けた場所のケヤキ（**写真❶**）やサクラの幹や枝は、ウメノキゴケやマツゲゴケなど、様々な地衣類に覆われることがあります。こんなに付いて、木が枯れてしまうのではないかと不安になる人もいるようですが、そんな心配は無用です。

地衣類の暮らしぶりを知るには、まず、その体の造りを知る必要があります。マツゲゴケを薄く切って顕微鏡でのぞいてみましょう（**写真❷**）。体の真ん中あたりは、細いひものようなものからできていることが判ります。これは直径5ミクロメートル（千分の5ミリメートル、つまり1ミリメートルの二百分の1）ほどの、菌糸です。菌糸は体の表面では、体を覆うような、皮層（表側は上皮層、裏側の茶色のところは下皮層）に変形しています。このように地衣類の体は菌糸でできているのです。つまり、地衣類は菌類なのです。一方、上皮層のすぐ下には、トレブクシアと呼ばれる緑藻が層をなしています。地衣類の体の中には、必ず藻類が住んでいて、菌類と共生しているのです。

地衣類の体の中の藻類は、水と二酸化炭素を原料として、光のエネルギーによって、糖分を作り出し、生きるための養分とします。地衣類を形作る菌類は、この糖分を利用して、暮らしています。その代わり、周りから水分やミネラルなどを吸収して、藻類に提供します。木の幹や枝にしっかりと張り付いていても、木から養分を取ることはありません。したがって地衣類が木を枯らすことはないのです。

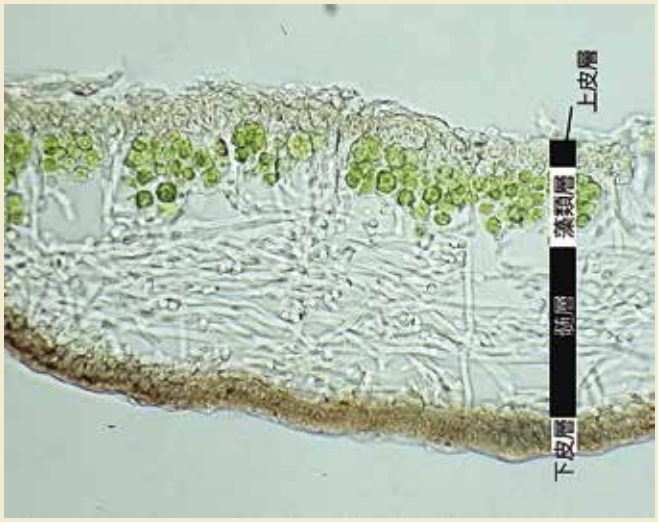
木の幹や枝に着生する地衣類は、体の表面から水分やミネラルを直接吸収するため、大気環境つまり大気汚染の影響を受けやすいと考えられています。その程度は、地衣類の種類によって異なります。このため、空気が汚れている工業地帯や都市周辺では、見られる地衣類の種類は限られますが、空気のきれいな地域、例えば房総丘陵ではたくさんの種類が見られる可能性があります。例えば、千葉市中央区にある県庁に隣接する公園や街路樹には、5種類位しか認めることはできません。一方、房総丘陵では、1本の樹木に20種、30種といった地衣類が着生することがあります。地衣類はきれいな空気の象徴なのです。

地衣類は、世界で1万5千種とも2万種とも言われ、日本からは1千7百種弱、このうち千葉県では299種が見つかっています。県内で最も様々な地衣類が見られる場所だろうと予想されていた、東京大学千葉演習林（鴨川市・君津市の境界付近にある）では、昨年度末に発表した報告書（＊自然誌研究報告特別号10）では、千葉県産299種の約半分にあたる151種を記録できました。この中には、これまで千葉県からは記録がなかった22種や、日本で初めて見つかったキヨスミゴケ（*Polymeridium proponens*）、全国的にも珍しいナメラゴンゲンゴケ（*Hypotrachyna adducta*）も含まれます。何種か新種も見つかっています。これからも、少しずつ種数が増えていきそうです。

（原田　浩）

＊千葉県立中央博物館『自然誌研究報告特別号10』

写真❶　ケヤキの幹を覆うウメノキゴケなどの地衣類



写真❷　マツゲゴケ断面の顕微鏡像

観察会報告

春の山の生きもの

4月15日に清和県民の森で山の学校 133「春の山の生きもの」を開催しました。
当日は風は強かったものの、散策するにはちょうどいい天候でした。最初に山で出会う危険な生きものを尾崎研究員から説明を受け（**写真❶**）、いざ自然散策路へ！自然散策路では、かわいらしい花々やみずみずしい新緑が出迎えてくれました。子どもたちも興味津々で、研究員の解説をしっかりと聞いていました（**写真❷**）。冬が終わり、新緑萌えるこの季節の山を「山笑う」といいますが、様々な生きものを観察することが出来た参加者のみなさんも楽しそうで、「人笑う」観察会になりました。

（2017年4月15日　清和県民の森にて　後藤　亮）

❶

❷

連載　小櫃川流域の生きもの

アオアシシギ～哀調のある鳴き声～

「ああ、風が涼しい」。
初夏の河口、引き潮で中州が現われています。そこに、約30羽のスズガモが休んでいます。
「ピィオ、ピィオ、ピィオ」と口笛のような声が海から聞こえてきました。まもなく、ハト大のシギが中州の浅瀬にいっせいに降りました。全部で14羽です。
真っ白な腹、赤みのある淡い褐色の背、少し反り返っている長いくちばし、長い脚、アオアシシギです。
アオアシシギはすぐに頭まで水につけ、えさをあさりはじめました。
なかにはくちばしを開いたまま川の流れを受け、小魚を捕らえているのもいます。しばらくして、眼を閉じて中州で休み始めました。
その後、舞い立ち際に「ピィーヨ、ピィーヨ、ピ、ピ、ピ、ピィーヨ、ピィーヨ」と鳴き、海へ飛んでいきました。
このシギはスマートでかざりけのない姿、清く澄んだ声、姿も声も美しい水鳥です。
特に、鳴き声は哀調を帯びて美しく、多くのファンがいます。私もその一人です。
岸辺のハマダイコンの桃色の花や新緑のヨシ、大きな河口、そこにこだまするアオアシシギの声。初夏の河口には一年中で最も快く、好ましい情景が広がります。
さて、このシギの群れが見られるのは谷津干潟（習志野市）やこの河口などだけで、ここでは85年秋に53羽の記録があります。最近は数が減少しつつあります（千葉県の自然誌本編7）が、この情景がいつまでも続くことを願っています。

写真：アオアシシギの群れ
（2017年5月　木更津市）

MEMO　アオアシシギ　チドリ目　シギ科
千葉県指定一般保護生物。干潟、河川、水田などの湿地で採食。スカンジナビア、カムチャッカなどで繁殖。県内には4～5月と7～11月に訪れるが、数は多くない。千葉県では東京湾岸の干潟、湿田などで見られる。

参考文献　千葉県（2011）『千葉県レッドデータブック－動物編』

（文・写真　千葉県立中央博物館ボランテア　成田篤彦）

しいむじなの由来

房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

今年度から山のフィールド・ミュージアムを担当しています。これまでずっと地層を見るために邪魔な（！）、地衣も草も鎌で削って調査をしてきました。木も草も虫も当然ながら土の上で生きていたことを実感する今日この頃です。

（岡崎浩子）